

リュウキュウアユ研究会/リバーリバイバル研究所
新村安雄

○リュウキュウアユ

リュウキュウアユ (*Plecoglossus altivelis ryukyuensis*) がアユ (*P. altivelis altivelis*) から分離された新亜種として記載されたのは 1988 年、当時琉球大学の西田睦博士による。リュウキュウアユは沖縄島と奄美大島で共通する種とされたが、沖縄本島の個体群は 80 年代にはほとんど確認されず、奄美大島での生息状況についても様々な問題が指摘されていた。新亜種記載に先立つ 84 年、川那部浩哉 (京都大学)、東幹夫 (長崎大学)、西島信昇、西田睦 (琉球大学) の三大学調査団が奄美大島の 9 河川の調査を行い、リュウキュウアユ保護の緊急アピールを行い保護活動の先駆けとなった。

現在リュウキュウアユは絶滅危惧種 I A 類 (CR) (環境省カテゴリー) に指定されている。

○リュウキュウアユの生息状況



リュウキュウアユは奄美大島の 12 河川で生息が確認されているが、産卵が確認されているのは、役勝川、住用川、川内川、河内川 (奄美市) 嘉徳川 (瀬戸内町) の 6 河川。

山間川、大和川についても産卵の記録がある。

奄美大島でリュウキュウアユの分布は焼内湾周辺の河川に生息する南西部集団と、住用湾。

伊須湾周辺に生息する南東部集団に分かれており、両集団の間に遺伝的な交流はほとんど無いと考えられている。

リュウキュウアユは、同じ琉球弧の沖縄本島にも、かつては生息し、そして、絶滅した。沖縄本島最後の生息河川は源河川（名護市）と考えられている。上流域の大湿地（おおしったい）といわれる樹林帯から東シナ海に注ぐ延長 12.8km のこの川のリュウキュウアユは、産卵場取水堰堤が建設されたことが直接的な原因となって絶滅した。

奄美大島からリュウキュウアユの再導入が試みられ、福地ダムとその流入河川での再生産は行われているが、海域に注ぐ河川でのリュウキュウアユ再生にはいたっていない。

リュウキュウアユ南東集団生息域最南端の嘉徳川は、奄美大島で唯一残った自然状態の砂浜海岸に注いでいる。嘉徳川のリュウキュウアユ個体群は住用湾に注ぐ河川との直接的な交流は少ない可能性があり、嘉徳川、および、嘉徳湾での再生産が重要と考えられる。

リュウキュウアユなど、アユについては、海域で生活する初期生活史の一時期に、砂浜の碎波帯を主な生活場とすることが知られている。砂浜の存在が生活史の中で重要な部分を占めることから砂浜の消失はリュウキュウアユの生存に重要な障害となる。

嘉徳浜は、現在防潮堤整備が検討されている。嘉徳浜の整備については、嘉徳川下流域の環境を毀損しないように進めるべきであることは言うまでも無いが、河川域だけでなく、周辺の砂浜が安定して存在することが望ましい。

直立したコンクリート護岸は前面の砂浜を減少させる事例は奄美大島でも多くの事例をもって確認されている。リュウキュウアユ保護の観点からも、現況計画についての見直しを求めるものである。